

第2章 海外から見た東日本大震災



大熊町の子どもたちとともに（会津若松にて）

変わりゆく境界線

早稲田大学社会科学総合学院准教授
花光 里香

「日本で大きな地震があった。家族は大丈夫か。」2011年3月11日、私は公務出張でアメリカにいた。早朝同僚からの電話で、東関東を大地震が襲ったことを知った。日本との時差は14時間。地震発生後すでに7時間が経過していた。

日本にいる家族の無事を確認し、慌ててテ

レビをつけるとともにインターネットで日本のニュースを見た。そこには、とても現実とは思えない、まるで映画のシーンのような光景が映し出されていた。"Unreal Reality"という言葉の意味を、そのときほど実感したことはない。

帰国するまでの約2週間、日本から配信される生々しい映像に釘付けになった。津波が全てを飲み込んでいく様子や破壊された原子力発電所の状況が連日ニュースで放送され、日本の危機は世界に伝わった。報道の中では、

起きてしまった出来事に対するアメリカと日本の異なる姿勢が現状を把握することを阻んでいた。明確な情報を迅速に知りたいアメリカに対し、日本は恐怖感を与えることを避け慎重に言葉を選んだ。ロジックを優先するアメリカと、フィーリングを重んじる日本のギャップが浮き彫りになった。

衝撃的な映像はさまざまなメディアやコミュニケーションツールによって世界中を駆け巡り、テレビや新聞では見られないものもインターネットを通して多くの人々の目に触れた。そこには、地震と津波の凄惨な爪痕と、悲惨な現実の中で「頑張る」日本人の姿があった。

滞在していたミシガン州の小さな街で、「日本人か。」と毎日のように誰かに声をかけられた。そうだと答えると、「あなたたちのために祈っている。」とみんながあなたにかい言葉をくれた。その後が続くのは、日本人に対する賞賛と尊敬の言葉だった。「非常事態でも周囲のことを考えて規律を守る連帯感がすばらしい。」「パニックにならずに冷静で、略奪や買い占め、便乗値上げが大きな問題にならないことに驚いた。」「私たちだったら『助けて』と言いつける。でも、日本人がよく使うのは『頑張る』という言葉。その我慢強さに心を打たれた。」多くの人々が別れ際に言ったのは、「日本人のことを誇りに思う。」という言葉であった。人間性が問われる局面での日本人の行動は文化を超えて共感呼び、人々は同じ人間としての誇りを感じたのだろう。

しかし、常に周囲のことを考え礼節と忍耐

を重んじるのは、多くの日本人にとって誇るほど特別なことではない。何よりも人々を驚かせたのは、日本で起きた「当たり前」の奇跡であった。

さまざまな価値観を持つ人々が暮らすこの広い世界で、思いを分かち合うのは簡単なことではない。自分と異なる状況にある人々の気持ちを理解するには経験と想像力が必要だが、それには限界がある。遠く離れた日本で起きた大惨事を知り、たとえ一瞬でも自分自身が震災に遭ったかのような気持ちにさせ人々の想像力を助けたのは、メディアとコミュニケーションツールの力であった。また、地球上に住む誰もが恐れる自然災害に立ち向かう日本人の姿は、国境を越えて人々の思いをつなげたに違いない。

その思いは、各国から続々と差し伸べられた援助の手にも表れている。今回日本は、アフガニスタンやバングラディッシュなど先進国以外の国からも援助を受けた。中国からは、初めて日本へ救援隊が派遣され物資の援助が行われた。痛みを分かち合う人々の姿勢からは、過去よりも現在、さらには未来を見ても歩める希望と、今後の世界のあり方が変わる兆しが見える。

人々を動かしたのは、日本に起きた悲劇を通して確認した、国を問わず私たちが真剣に向き合わなければならない問題への意識ではないだろうか。「サステナビリティ（持続可能性）」という言葉が使われるようになって久しいが、持続可能性をもたらすのは技術の進歩ではなく、人々の意識である。

ネイティブアメリカンは、7代先の子孫のことまで考えて生活したという。彼らは7代先に生きる人々の生活を守るため、世代を超えて価値観を受け継ぎ暮らしてきた。そこには、家族、コミュニティ、自然との強いつながりがある。つながりを保つには、たとえ自然に対しても、相手を支配するのではなく共に生きていく姿勢が求められる。今回の震災は、世界にその重要性を再認識するきっかけを与えたように思えてならない。

30年以上も前から言われてきた"Think global, act local."という言葉、震災後多くの人が改めて考えたのではないだろうか。地球全体のことを考えて身近なことをすることの大切さには、私たちは全てつながっていて、自分に関係のないことなどひとつもないという意味が含まれている。誰もいない部屋に灯る電気がどこでつくられているかを考え、気づいた人がスイッチを切る。毎日使うものや食べるものがどこで作られどのように店頭に並ぶかを積極的に知り、考えて選ぶ。困難なことを解決するには、簡単なことを着実に、丁寧に毎日を生きたことから始まるのだ。ひとりひとりが世界とどのようにつながり、どのような日本で、どのように生きていきたいのか、日本に住む私たちも選択を迫られている。

つながるといことは、人、家族、地域、国、自然を取り巻きさまざまな境界線を問い直すことでもある。震災直後に人々を結びつけた「つながり」という言葉の意味を、常に考えながら生きていきたい。自分と異なる状

況を想像し、日常に戻れば戻るほど、日常を奪われた人々のことを思いながら毎日を過ごしたい。日本が経験した未曾有の災害を通して世界が分かち合ったこの思いを決して忘れず、その思いに従った行動を持続していくことが、同じ地球に生きる私たちの使命である。

アメリカから見た東日本大震災について思うこと

早稲田大学大学院社会科学部博士課程
高倉 美幸

東日本で巨大地震が起きた3日後の3月14日、筆者は電車で成田空港へ向かった。以前から研究のためにアメリカのニューヨーク州郊外等で資料収集をすることを計画していたからである。厳密に言うと日本を離れたのは3月15日であったのだが、筆者の旅は3月14日から始まっていたようなものだった。15日の午前の便に間に合うように、事前に空港近くの宿泊先を予約していたのである。本来ならば、夕方頃自宅を出て宿泊先へ向かって十分なのであるが、今回はそのようにスムーズに成田にはたどり着けないだろうと思い、午前10時頃自宅を出ることにした。節電のため運転が中止されていた京成線の運転再開を待つなどして、最終的に宿泊先にたどり着いたのは午後10時過ぎであった。

翌日、早めに宿泊先を出て空港に到着すると、搭乗手続きのフロアには長蛇の列が出来ていた。無論、列には日本人と思われる人た

ちも並んでいたが、外国人と思われる人たちも大勢並んでいた。筆者はその時、震災の影響で出国や帰国が予定通り出来なかった人たちが空港に詰めかけているのだろうと思った。しかし今になってみると、あの列の中には、震災や原発事故の影響を恐れて日本を脱出しようとしていた人たちが多数含まれていたのだろうと思う。

ニューヨークの空港から、州の郊外へ向かう電車が発着するターミナルまでは、タクシーを利用した。ドライバーはインド出身の、見たところ30代ぐらいの男性だった。私が日本から来たことを告げると、彼は少し驚いた様子だったが、暫くして日本への思いを語り始めた。彼には、学校で知り合った日本人の友人がいて、彼、彼女たちはいつも笑顔を絶やさないと、前向きで素晴らしい人たちだという。そして、「日本はとても力のある国だから、今回の震災からもきっと復活できるよ」と言ってくれた。そして、「それに、インド人と同じで、日本人は計算も得意だしね。アメリカ人は計算が苦手だから・・・」と冗談を言って、トンネルの通行料を徴収する係員が、お釣りの計算にもたついているのをからかっていた。

このドライバーに限らず、今回のアメリカ滞在では、筆者の友人・知人も含め、多くの人から温かい励ましの言葉ももらった。無論、未曾有の災害に直面して苦しむ人びとを思いやる、博愛主義的な立場からの言葉も多かったが、先述したタクシードライバーのように、日本に対して肯定的なイメージを持っている

人からのいたわりの言葉や励ましも多かったように思う。

帰国して新学期が始まり、今回の震災に関する発表の機会を得た。筆者はアメリカの新聞・雑誌が、震災をどのように報じたかを調べることにした。最も筆者の興味を引いたのは、震災後に日本の人びとが見せた行動や精神についての記事である。3月19日のニューヨーク・タイムズ電子版のコラムには次のような文がある⁽¹⁾。

「私たちは日本から何かを学ぶことができるかもしれない。今回の地震、津波、そして原発事故においても、日本社会は、ばらばらになってしまうことはなく、むしろ今まで以上に結びつきを強めた。今日の日本における無私の精神、平静、そして規律は、福島第一原発の作業員たちが、象徴的に示している。彼らは、不平を言わず、名前さえ知られていないが、危険な量の放射線にさらされるリスクをおかして、市民を危険にさらすメルトダウンを防ぐために懸命に作業しているのである。」

このコラムは、震災後の日本の人びとに見られた冷静さや忍耐強さ、責任感の強さを紹介し、そうした特性を概ね好意的に伝えている。これは、アメリカにおける、震災以前の日本に対するイメージにも沿ったものだと思う。こうした日本の特性に理解を示し、アメリカもそこから学ぶことがあるのではないかと（強制するのではなく）語りかけているところにこのコラムニストのバランス感覚が感じられる。

また、このコラムの興味深いところは、日本のイメージに対置するようなかたちで、コラムニスト自身が持つ自国のイメージアメリカのイメージについても語っているところである。

私たちアメリカ人は押しが強い。私たちは時々、命や暮らし (life)、予算に関する協議を、最も弱いものを押しのける競争であるかのようにみなしてしまう。しかし、私が望むのは、無私のもて、共通の利益のなかに自分の利益を組み込んでいく日本の人たちから、私たちが何かを学ぶということだ。

このコラムニストが言うほどに、日本とアメリカが実際にあべこべであるかどうかはここでは問わない。しかし、アメリカ人であるこのコラムニストは、日本を見つめることによって、自分たちが持っていないと思うもの、あるいは自分たちに足りないと思うものについて改めて思い、このように表現したのであろう。このように日本の人びとの心性を、一種の傾向として把握することは、一定の意味を持っていると思われる。

しかし他方で、こうした捉え方には限界があることも事実である。イギリスの雑誌、『エコノミスト』は、日本では我慢強さが美德とされてきたが、そうした我慢も、ことに被災地においては限界にきていること、そして、東京などの比較的被害の少なかった地域の人びとが「がんばろう」と言い続けていることに、被災地の人びとが違和感を覚え始めていることを指摘している。

「首都にそびえ立つスチール製の建造物、東京タワーにライトアップされているのは、『がんばろう日本』というフレーズである⁽²⁾・・・(中略)・・・東北の人びとは、このフレーズに怒りを覚え始めた。というのも、このフレーズは、『もっと耐えろ』と断言するように聞こえるからである⁽³⁾。」

『エコノミスト』の記者は、首都圏には届きにくい、しかし被災地においては確かに存在する「声」を拾い上げている。

多くの人びとに見られる傾向を把握した上で、そこにあてはまらない事柄を拾い上げ、その意味を同時に考えていくことも意味のある行為であることに気づかされた。

<注>

(1) The Japanese Could Teach Us a Thing or Two, The New York Times

(http://www.nytimes.com/2011/03/20/opinion/20kristof.html?_r=1&scp=1&sq=Kristof%20March%2019&st=cse), 2011年8月7日閲覧。

(2) 4月11日、東京タワーに「GANBARO NIPPON」というローマ字のメッセージがライトアップされた。次のURLを参照。「東京タワーから『がんばろう日本』、『産経ニュース』、2011年4月12日 (<http://sankei.jp.msn.com/region/news/110412/ky11041210440001-n1.htm>)、2011年8月7日閲覧。

(3) Silenced by gaman, The Economist, April 23(2011).

東日本大震災に対する ラテンアメリカ諸国の対応

早稲田大学国際言語文化研究所招聘研究員
工藤 章

2011年3月11日の東日本大震災により被災されました方々に謹んでお見舞い申し上げますとともに、被災地の一刻も早い復旧をお祈り申し上げます。

さて、約40年以上に亘り筆者自身がお世話になっている中南米からも、心温まるお見舞いの言葉と支援の申し出が届き、今も色々な形で支援が続いています。天皇陛下に、エクアドル コスタリカ、チリ、ハイチ、ホンジュラス、メキシコ、などの大統領からお見舞いがあり、菅直人前総理大臣のもとには、アルゼンチン、ウルグアイ、エクアドル、エルサルバドル、グアテマラ、コスタリカ、コロンビア、スリナム、チリ、ドミニカ共和国、パナマ、パラグアイ、ブラジル、ベネズエラ、ホンジュラス、メキシコ、などの国々の大統領、さらにキューバ・カストロ議長やジャマイカの総理からお見舞いが届きました。

支援の申し入れも多く、メキシコからは救援犬6匹を含む救援隊が3月14日には到着しました。また、ベネズエラからは食料、水、毛布などの支援物資を積載した救援機を3月19日に派遣し、日本から帰国を希望するベネズエラ人と隣国のコロンビア人を乗せて帰ると言う素早いアクションを取りました。また、被災者に対する追悼のミサや催し物が各地で多数開かれました。

ブラジル、アルゼンチン、ペルー、メキシコなどでは日系人や在住の日本人が中心になって数多くのイベントが実施され、さらに中南米諸国で国や州などが中心になって行われた企画が多数ありました。

ペルーでは、3月18日は、大統領令により「全国追悼の日」とし、公的機関等にて半旗を掲げると共に、大統領の指示でシプリアニ枢機卿（日本大使公邸占拠事件で人質解放の仲介役を担った方）が主催する追悼のミサが開かれ、大統領以下政府関係者100名が参加しました。教会の外で約100名の市民も祈りを捧げました。

チリでは、日本・チリ経済委員会（1978年設立、2010年に27回目の委員会が東京で開催された。）のチリ側の委員長であるデ・アンドラカ氏の呼び掛けで、日本国民を激励する外務省主催の集会在サンチアゴ市の中心にあるモネダ大統領宮殿に面したブルネス広場で催されました。モレノ外務大臣を含む550人のチリと日本の関係者が集まり、1941年にチリ在住邦人からサンチアゴ市制400年を記念して贈呈された縦20メートル横30メートルのチリ国旗を掲げ、荘厳な雰囲気の中で式典が行われました。

日本外務省のレポートによると、デ・アンドラカ委員長からは、「日本国民はこれまで何度かチリが同じような状況に苦しんでいる時、支援の手を差し伸べてくれた。チリは日本国民のことを身近に感じている」と述べ、モレノ外務大臣は、2010年2月のチリの大地震での日本の支援に謝意を述べると共に、「惨事に

において厳しい状況に直面し、人としての弱さを見せることも余儀なくされる中、日本国民は秩序と他人への思いやり、そして困難に直面しての尊厳という市民としての素晴らしい教訓を示したことを強調したい。

3月11日の出来事とその結果は、日本国民の胸に深く残るものになろう。日本はこれまでの歴史が示してきたとおり、再び立ち上がることを強く確信する。『まさかの友は真の友』。この言葉を日本国民に贈ることとしたい。」と挨拶したとのこと。

被災者追悼ミサ、チャリティーコンサート、サッカーの試合等の機会を利用して募金活動が行われました。例えば、ウルグアイの3月12日・13日のサッカー・プロリーグの試合すべてで犠牲者を悼み黙祷をしました。

また、日本の千羽鶴の習慣は中南米でも広く知られていますが、今回を機に新たにこの日本の文化を知り、小さな村の小学校から始めて多くの団体から千羽鶴が届けられました。また、メキシコでは「日本が教えてくれた10のこと (10 Cosas que nos enseñó Japón)」というタイトルのメールがメキシコ市民の間で話題を呼び、日本国民の地震災害に対する姿勢を賞賛しています。

中南米では、非常事態時には想像を絶する混乱が生じ、混乱に乗じた犯罪も多く起きるのが常態化しているので、日本の冷静さや助け合う行動を知り感動を呼んでいるのです。

一方、日本の中南米の大使館の対応は様々でしたが、ブラジルやアルゼンチンの大使にお会いして3月11日の事をお伺いすると、24

時間体制を敷き大使館一丸となり、日系人を含み日本にいる自国民の困難に対応したというお話を聞きました。常日頃、日本との関係強化を目指して努力されている中南米の国々の温かい対応に感動致しました。

2010年1月に域内の最貧国であるハイチでマグニチュード7.0の地震が発生し、20万に上る死者が出ました。世界中から1000万人の小さな島に支援の手が差し伸べられました。そして、2010年2月28日にマグニチュード8.8の地震と津波が日本の地球の反対側のチリの南部で起きました。約500人の犠牲者が出ましたが、殆どは津波による被害でした。太平洋に面している中南米の国々は地震と火山の噴火に襲われ、それに加え中米とカリブ海の各国は、日本の台風と同種のハリケーンによる被害に毎年見舞われています。

親日的な中南米の人々との絆が今回の悲劇の中で強くなりましたが、今後、この関係がさらに強くなり平和で明るい世界を創る大きな力になることを祈ります。

ある外国人研究者の「知識人としての自己責任論」

—東日本大震災に思う

早稲田大学国際言語文化研究所招聘研究員
洪 琬伸

私は、沖縄に思いを寄せてきた「外国人」研究者である。沖縄戦の経験を韓国に伝えたく、10年近く沖縄の研究や現地調査に力を入

れてきた。戦時教育を受けた愛国人や、目に迫ってくる違う人種（米軍）への脅威が、いかに「目に見えない恐怖」となり、「人間が人間でなくなる」状況を作り出したのかを、朝鮮人や沖縄人の体験を中心に研究してきた。

震災の経験後、私は、自分がこれまで語ってきた「目に見えない恐怖」というものが、いかに抽象的であったのか、言い換えればいかに学者ぶっていたのかを、身をもって経験している。「恐怖」というものは余りにも具体的に、日々の食卓こそが問われているのだから。

そして、その具体的な日常生活に、私がこの社会で何かを教えている教育者であることより、時には「外国人」であるということが最も重要な判断基準になり、そのことが非常時に直ちに「恐怖」となりうることを経験した。外国人である私と、知識人である私は分類できないが、前者の場合「日本から逃げる」という選択肢が、後者の場合は「日本に残る」という選択肢が用意されている気がしてならなかった。理性的にどのような情報が正しいのか判断する暇もなく「どうしても日本に残る理由のある人でなければ帰国を」と自国の大使館から勧告された時点で、外国人の一人一人は「もはや自分の身は自分で守らなければならない」という選択を強いられた。日本に残ることへの責任は全て「個人」が背負わなければならない立場に置かれたともいえるだろう。

真ん中の選択は存在しない不思議な状況で何を選択するにしろそれは個人の「自由」で

あったが、その「自由」とは、帰国する「外国人」の群れが報じられた時点で、テレビ画面に映る「責任なき社会の一員」に他ならなかった。私は日本に残ることを選択したが、「日本社会は日本人の手によって復興するしかない」といったコメントや報道よりも、「逃げるのは外国人のみ。東京は安全」という言葉に安心する人が大勢いることに、果てしもない孤独感を感じていた。

たとえ東京に残っても、私はしょせん外国人であるという孤独感は、それでも残る必要があるのか、悩んだ。韓国の母は、4万人を超える人が帰国するなかで娘が帰国しない現状を受け止められず、毎日のように電話をかけてきて、「あんたは日本人でもないのに」と泣き崩れる。風向きまでも知らせる母親の情報力に驚いた。もはや日本の天気予報は、海外でも敏感に反応するほどになっていたのであり、私を愛する家族の緊張感はピークに達していた。

職場は春休み中の大学で、最も責任や義務のない「非常勤講師」。批判する人なんて一人もいない。私の理性はいつのまにか「東京に残る理由がない」という結論をひそかに下していた。しかし、私は日本に留まった。休命中だから国に帰ると自分で言い聞かせれば、何の道徳的「罪悪感」を感じることもないかもしれないのだが、そういう風に自分に言い聞かせることは到底できなかった。

何もできない「知識人」、何もできない「外国人」、何もできない人間であることが情けなかったが、それでも何をするのかという問い

かけをした際、荷造りをして国に帰るという選択はできなかった。それは何故なのか。自分の書いた論文が「平和」や痛みに対する「共感」といったものであるから？残念ながらそういう奇麗な説明は出来ない。いかなる奇麗な言葉も今回は廃棄せざるを得ない。ただただ私は、情けなかったのである。

雨に溶かされ降ってくるかもしれない放射能の恐怖から、多くの人がひそかに動いた。被災地周辺の人々は東京へ、東京の人々は関西、関西の人々は沖縄や北海道へ。そして余裕のある人は海外へ。そして空間をシフト出来たら「避けられる」、あくまで「平和」のような日常が待っているということが、私を苦しめる。

多くの外国人研究者が休みである故に国へ戻ったが、災害の際、日本人の研究者の海外行きが急増している事実を、私は知ってしまった。そうした情報が次々と耳に入ってきたのは、私が外国人研究者であり、緊張感なしに海外に行くことを告げられる相手であったためであり、私の「偏見」だと何処かで信じたい。

が、一部であるにしろ私の周りにそういう動きがあったことは事実だ。北海道、韓国、ヨーロッパ、アメリカ、現地調査や休暇を目的に出かけた人々が、震災中、一人東京に残された私の安否を懸念して電話をかけてきた。沖縄の友人が「あんたはしょっちゅう沖縄に来るのに、今こないでどうするの」と電話をかけてくる。沖縄の国際通りは日本人の観光客でにぎわっていると言われ、研究者のグル

ープも多いことを知らされた。名の知られた有名大学の先生が、家族連れで中国に向かったと聞く。日本には戻らないつもりで中国へ旅立ったという。放射能への危機感が高まりつつあった時期であった。日本人の研究者である。自らの旅程を知らせ、「あなたは国へ戻らないのか」という言葉がいつのまにか決まり文句のようになった。怒りさえ感じてしまう。一体、何だろうか。

こういう状況のなか、私の感情はあるラジオ番組でエスカレートしていった。朝5時まで被災地の人々を少しでも勇気づけようとスタートした番組であった。ドラえもん、古い演歌、ポップなどが、被災地に送る多くのエールと共に日の出の時刻まで流れ続けた。そして、ある高校生がエールを送ってきた。

「僕は、受験生です。こんな時に受験勉強などしている自分がとても情けないと思います。僕はこのままでよいのでしょうか。本当にごめんなさい」

こういう内容だった。思わず泣いてしまった。彼に向って「良いのです。一生懸命勉強して、きっと世に役に立つ人間になってください」と答える被災地の人からのメッセージも読み上げられ、多くの音楽が流れた。しかし、いったん流れ始めた涙は、なかなか抑えることが出来なかった。受験勉強を恥じる彼らが大学に入った時、私、私たちは、一体、何を教えられるのだろうか。涙が止まらなかった。私は「情けなさ」のため、日本に留ま

ったとしか、自分の選択を説明することが出来ないのである。

外国人の同僚たちは、私に言う。「第二次世界大戦中、日本人だけが勝っていると信じていた」と。第二次世界大戦を研究テーマとしている私は、そのことを誰より批判的に捉えてきた。

しかし、私はそういう見方で今回の災害の際の「日本社会」を分析することを取りやめた。震災中、原子力という科学の危うさ、日本の政治の無気力と民主主義の限界、貧困地域層と企業倫理のなさ、情報民主主義などいろいろな側面で今回の問題を考えてきた。

今、私は、はるかに放射能の高い現場で取材し続けたメディアの人間を批判することを保留した。放射能が高いことを知りつつも、その地域に留まることを願う住民や、貧困地域の生計を支える「原子力発電所」の維持を掲げ、再び選挙に出る政治家を、こういう状況を目にしても安全性を言い続ける科学者や、まともな知識に基づくコメントすらできない企業の無責任な言葉も、今の私は、「日本社会論」とするあらゆる理論的な批判を先延ばししたい。

「逃げるか」か「残るか」という選択肢しか残らなかったかのように見えた外国人の立場で考えると、日本における学者には、「残りながらも沈黙する」という真ん中の選択肢が存在したように見えたからであり、その情けない労働現場が、私が信じる「学問」や言葉の現場である以上、私は外国人であれ、「知識人の責任論」を先に批判的に捉えざるを得な

い。

作業中に被爆者3人が出てからいつのまにか現場で働く「下請け会社」という語に代わり「協力会社」という語が誕生している。メディアで流れるこれらの言葉を容認してしまう耐えがたい社会の「沈黙」に満ちた雰囲気がある。日々の生活を支えてきた光が貧しい地域の犠牲に成り立っていた事実を、「仕方ないものである」と受け止めていた私たちは、今度は、自衛隊員、消防士、いわゆる「協力会社」の人々が被爆する状況をテレビで見つめながらも、「そういうことでもしなければ助からない」と、何処かで希望を託しているであろう。

「自分の身を守るための小さな過剰反応が、結局、被災地を苦しめているのよ」と震災中日々を共にした「日本人の母」は言う。その言葉が胸に響く。その通りである。そういう希望が「共感」の輪を広げ、私たちを沈黙させているからだ。しかし、逃げる学者の姿を見届けた私は、マスクや傘を持って逃げられない人々が、もっとも人間的に見えて仕方ない。

学者は身の安全や居場所を確保してから、迫ってくる状況への判断を言葉にするのだろうか。現場を離れた学者の言葉は、人々の胸にひそかに訪れる希望が、他者を苦しめているという事実を訴えられるのだろうか。それであなたはどうするのか。それしか「問う」ことができない、そういう「恐怖」が作り出した、ある人の犠牲にしか見出すことのない「希望」。その「希望」から私たちは意識的に

「逃げる」ができるのだろうか。

犠牲がでても希望を託したいこれらの「沈黙」に向かって、何の役にも立たないだろう。ならば私は、「知識人としての責任論」をむしろ廃棄し、ごく普通の人々が感じる恐怖のなかに身を寄せ、戯れのように恐怖にさらされながらも、自分の居場所を守り、逃げ場のない日常のなかで行動するごく普通の人々の側に立って、この状況をこの日本で自分の身に迫る恐怖と共に考えようと決めた。それが、東京に留まった「情けない」理由である。

「あなたは何処にいたのか」という単純な「知識人批判」から、私は、今のところ自由である。しかし、日本に留まったにしろ、私は「残りながらも沈黙する」という真ん中の選択をした多くの学者のグループにいる。問題となるのは、あなたは何処にいたのかではなく、それであなたは何をしたのか、ということであろう。

いつか私は日本を離れるかもしれない。しかし、今、この時点で、私は日本の社会におり、その場で言葉を発表してきた。いつ終わるかもわからない研究も日本にある。今私の「居場所」は日本社会であり、それであなたは何処にいたのかではなく、それであなたは何をしたのかに、少なくとも言葉として応える義務がある。そして、それであなたは何をしたのかという問いに、少なくとも私の教え子たちに向かって、恥じることはないよう「知識人の自己批判論」を書き残そう。

4月からは、一体、何を教えられるのだろうか。私は学生たちに「逃げるか」「残るか」

という選択肢を取り出し、「日本人として頑張っしてほしい」と言いたくない。私は、そういう選択肢がいかに暴力的であるかを知っている外国人であるからだ。私は、科学的に放射能の危険度を説明するつもりもない。目に見えない恐怖にとらわれ、天気予報までもチェックする誠実さと、風と共に雨と共に降ってくる放射能を防ぐ能力は私にはない。

だからと言って、この問題が世界と共に考えるべきものだという抽象的な「平和論」を教えるつもりもない。自然の力やグローバルな貿易システムという現代社会においては、世界規模で被害にあうのだとしても、重軽があるからだ。ただ、学生たちとこの現在進行形の「目に見えない恐怖」を共に経験した一人の研究者として、風のようにまたは雨のようにこの恐怖のなかに潜む偏見や差別が、いかに被災地の人々に、または、この社会を生きる一人一人の人間から「逃げる」自由を奪ってきたのかを教えることはできるかもしれない。

そして、学生たちに言いたい。あなたは何をしたのかと問われる時に、「命こそ宝」という語を忘れないこと。私自身が、沖縄から学んだこの言葉を、「見知らぬ他者と共に逃げるための言葉」として議論してみたい。他者を配慮する言葉を最後まであきらめない「学問」、その人間のための「知」を口にしてきた私、私たち学者にとって、震災後の世界は、背景なき自画像は存在しないと示しているような気がしてならない。

SGRAかわらばん359号(2011年4月6日)より転載

東日本大震災についての感想

早稲田大学大学院社会科学研究所修士課程
伍 ジャニ

3月11日に発生した東日本大震災は、有史上最大級の「マグニチュード9.0」を記録した。死亡・行方不明の人数は30,000人になり、避難している人、家族を失った人がまだ苦しんでいる。また、震災が発生した後、原発問題や施設の安全問題も次々に論議され、今もそれは続いている。その問題がいつ解決できるのか、まだ明らかにされていない。

自然災害は我々人間の手で止められないもので、私たちができるのは声をかけ合い、被災地の人々の手伝いをするだけなんだと思うようになった。人類は発展した科学技術や文明社会に慢心していて、自分はこの世界の主人だと思っている。しかし、私たちは本当に自然を支配しているのか。むしろ私達がアリをみて、小さい生き物と思うように、自然は我々人間を馬鹿にしているのではないだろうか。

今度の震災は全世界に日本人の素質を示した。インターネットのお陰で、我々は全世界のニュースや各国の国民の発言を見ることができるようになった。ロシアの独立系紙ノーバヤ・ガゼータ(電子版)は3月13日までに、東日本大震災の甚大な被害にもかかわらず、日本人が社会的秩序を失わず、互いに助け合う姿を「日本には最も困難な試練に立ち向かうことを可能にする『人間の連帯』が今も存在している」と称賛した。(ゴロブニン・タス

通信東京支局長の記事)

3月20日付の米紙ニューヨーク・タイムズは、福島第1原発で放射能汚染の危険に立ち向かう作業員の献身ぶりを称賛し、「米国は日本から何かを学び取るべきである」とする論評記事を掲載した。さらに、日本政府の対応と比べ、苦難に耐える日本人を「立派で高貴だ」とし、「米国人は日本人の精神から学ぶべきものがある云々」と伝えている。

「怒鳴り合いもけんかもない」「本当に強い国だけがこうした対応ができる」。ベトナムのメディアは東日本大震災での日本人の冷静な対応ぶりを報道していたし、在日ベトナム人も驚き称賛する声を伝えた。

それぞれのニュースの中で、意外に中国の報道が多かった。大震災を1面で報じた3月12日付の中国紙、環球時報も「日本人の冷静さに世界が感心」との見出しで報じた。「中国は50年後でも実現できない」「とても感動的」「われわれも学ぶべきだ」との反響の声があふれた。

非常事態にもかかわらず日本人は「冷静で礼儀正しい」と絶賛する声が、インターネットの書き込みなどに相次いでいた。短文投稿サイト「ツイッター」の中国版「微博」では、ビルの中で足止めされた通勤客が階段で、通行の妨げにならないよう両脇に座り、中央に通路を確保している写真が、3月11日の夜、投稿された。

このようなニュースを見て、中国人は、日本人は日本国民が自らの行いをもって一江沢民政権以来の反日教育が中国国民に植え付け

た「悪魔的な日本人像」の一角を崩したことになるのと同時に—中国人自身の意識変革の発端ともなると思っているようだ。

日本人にだけでなく、そのことは中国人自身にも非常に大きな意味があると考えられる。我々中国人はこれから世界の舞台でどのような態度で歩いていくべきかという問題を考えると、歴史をもう一回振り返って勉強する、それでも各国の発達かつ安全な技術、国民の優れた性質を学び取って、各国との国民理解を促進しながら、母国をさらによく建設するという二つの選択がある。もちろん私は後者を選ぶ。

授業で、留学生が東日本大震災のことについて発表する時に、先生はべつに日本のことを褒めて発表しなくていいと言った。私の考えからみれば、実は私たちがわざと褒めようとしたのではなく、本当に感心したので、自分の気持ちを日本人に伝えたい。

従って、短文投稿サイト「ツイッター」の中国版「微博」を利用して、日本の写真を撮って、中国の人々に見せた留学生たちの気持ちがよく理解できる。彼らは私達と同じように、中国の同胞に事実を隠したニュースに騙されず、本当のことをちゃんと見て、それに学んでほしいと思っているだけだ。

しかし、中国でも私を感動させたニュースが一杯ある。2008年、四川大地震が発生した時に、一枚の写真をめぐって、次のようなことが記載されていた。救援隊の一人のメンバーは自分が訓練した救援犬と一緒に倒壊したビルに入って、救助を始めた。12時間後、合

せて28人が廃墟から引きずり出された。その救援隊員はあまりの疲労で、倒れてしまった。彼の隣りではその救援犬が永遠の眠りに就いた。救援隊員はずっとその犬を自分の家族のようにみて大切にしていたので、周りの人はどうやってそのことを彼に知らせるべきか、悩んだ。その写真のテーマは「命の価値は同じだ」であった。

その写真をもう一度見たら、私は自然が人類のことを馬鹿にしているとしても、私達が生物の生命をもっと大切にすれば、きっと、そこに希望があると思うようになった。

参考文献

産経ニュース 3/12 3/13 3/20、3/21 3/31

微博 <http://sina.weibo.cn>

東日本大震災で海外から評価された「秩序ある冷静な日本人」

早稲田大学大学院社会科学研究所修士課程
田中 聡子

東日本大震災という未曾有の災害に直面した日本では、暴動、略奪、強盗、買い占め、便乗値上げなど、ハリケーン・カトリーナやハイチ大震災の際に多発した、震災時に付きものとされる現象はほとんど起こらなかった。そうした無法状態に陥るどころか、むしろ被災地では救援物資の受け取りに列を作って並び、都心のスーパーなどでも買い占めを防止するルールを各自でつくるなど、秩序ある行

動が数多く見られた。こうした日本人の冷静で秩序ある行動が、海外メディアから大絶賛されたことは周知の事実である。

例を挙げると、アメリカの新聞「ニューヨーク・タイムズ」は、「日本の人々には真に高貴な忍耐力と克己力がある。これからの日々、日本に注目すべきだ。間違いなく学ぶべきものがある。」(2011年3月11日付)、ロシアの新聞「ノーバヤ・ガゼータ」は、「日本には最も困難な試練に立ち向かうことを可能にする『人間の連帯』が今もなお存在している。他の国ならこうした状況下で簡単に起こり得る混乱や暴力、略奪などの報道がいまだに一件もない。」(2011年3月13日付)と、書いている。また、1995年の阪神・淡路大震災の際も、同様の理由で海外メディアから高く評価されている。

では、なぜ日本人はこうした秩序ある行動をとることが出来たのだろうか。その理由の一つとして、過去の復興の経験による、政府、他者への強い信頼が挙げられる。阪神・淡路大震災、中越地震などの過去の災害時、政府は早急に救援物資を用意し、NPO、ボランティアが様々な援助、支援を行った。こうした経験から、確かに食料は底をついてきているが、もう少し待てば政府、他者が支援してくれるだろうという期待感、安心感が生まれ、それが人々の落ち着いた行動へ繋がったと考えられる。

二つ目の理由としては、日本人の共同体意識、コミュニティの重視が挙げられる。自分たちには、政府、NPO、ボランティアといっ

た助けしてくれる存在がある。その一方で、自分たちよりも困難な状況にある人々の存在がある。この狭間で、人々の間に助け合い、我慢、自己犠牲といった共同体意識と呼べるものが生じたと考えられる。こうした個と全体のバランスの重視は、日本人の中で受け継がれ、その国民性に織り込まれた特性のようである。

明治初年来日し、大森貝塚を発見したアメリカの生物学者エドワード・モースは自著『日本その日その日』の中で、「日本に数ヶ月も滞在していると、どんな外国人でも、自分の国では道徳的教訓として重荷となっている善徳や品性を、日本人が生まれながらにして持っていることに気づく。最も貧しい人々さえ持っている。」と書いている。

近年、個人主義化に伴う道徳心の低下を嘆く声も聞かれるが、震災という非常時でさえも公共秩序を守り、集団の利益を優先しようとする人々の姿は、綿々と受け継がれてきた日本人の公共道徳の高さが、今もなお存在し続けていることを明らかにしたと言えるであろう。

また、被災地取材した外国人記者たちは、被災者の「仕方がない」という声を多く耳にし、ピンチの時こそ一つになろうとする日本人の姿に心を打たれたという。この、災害を受け入れてでもいるような「仕方がない」という発言は、自然と共に生きてきた日本人独特の感慨のように思われる。過去に数々の災害に見舞われた日本人は、人間には計り知ることのできない自然の力を実感しながらも、

自然の恩恵を受け、それと共に生きていかなければならなかった。今回の震災に伴う津波で家族を奪われた漁師の男性が、「これまで共に生きてきた海から離れることは考えられないし、それ以外に生計を立てる方法もない」と話していたことが印象に残っている。このような人生と自然との不可分の実感が「仕方がない」という言葉に集約されているように思われた。

ここまで、海外から評価された礼儀正しく忍耐力のある日本人の行動について論証してきた。こうした非常時の冷静な対応は評価されるべきものではあるが、その一方で、規則に捉われ、その中でしか身動きを取ることができない日本人の弱さも露呈したように思われる。政府や他者への過剰な信頼、期待は、自分自身で生きていく力を弱め、思考を停止させる。自分の行動の決断を他者に委ねておきながら、その一切の責任から逃れ、批評に徹してはいけぬ。今回の震災で高く評価された日本人の美德ともいえる特性を大切にしながらも、明るみになった弱点にも目を向け、そこから学ぶこともまた重要である。

東日本大震災について

早稲田大学大学院社会科学研究所修士課程
アン・キ

今年3月11日に東日本で日本における観測史上最大のマグニチュード 9.0 を記録する地震が発生した。当時、私は春休みで中国の北

京の家に行った。地震のことを聞いて、最初はこのような大きな災害になっていたとは全く思わなかった。なぜならば、日本はもともと地震が多い国なので、防災の面も完璧だと思っていたからだ。しかしながら、今回の震災は地震より津波で被害が大きかった。地震と津波の写真、映像を見たら、人間としての無力さを感じざるをえなかった。日本にいないけれども、自分が生活していた街、自分が行ったか行きたかった街、そして被災されたお年寄り、居場所がなくなった動物を見たら、涙がとまらなかった。

その時、自分には何ができたかという、祈りしかなかった。しかし、留学生として日本人との一体感も感じた。天災の前では、自分も国籍の区別を持たないただの人間だということを実感した。

今学期のゼミで「東日本大震災」のテーマを取りあげ、ゼミ生たちがさまざまな側面から震災について発表した。みんなの発表により、地震だけではなく、災害後、日本人が見せた国民性とか、原発問題についても深く理解することができた。私も震災に関する中国のマスコミ報道をテーマとして一度発表させていただいた。発表はあまりにも浅いものだったけれど、資料を集めるプロセスの中で感心したことが多かった。

まずは中国人の意識が変わったことである。東日本大震災が中国のマスコミに大きく報道されたのは、もちろん政治、経済などの影響があったが、一方、中国人の地震または日本に対する意識が変化したのではないかと私は

思う。これまで中国では地震を体験したことがない人々が多かったが、四川大地震の発生により、ほぼ全国の人たちが地震ということを実感できた。それによって、地震は「他人ことではない」という気持ちを持てた。被災者たちの立場ももっと理解できるようになった。

そして、2008年に発生した四川大地震の時に日本政府が多額の義援金を送ったこと、日本のコンビニでは四川大地震向けの募金箱が設置されていたこと、国際救援隊を派遣してくれたことを、中国人は覚えている。「これらはいずれも民族の感情を超越した人道主義を表している」と今こそ「恩返し」のときだと考えた中国人も多くいたようだ。歴史や文化交流において深く関わっている日本と中国、これからお互いの理解を深めるよう期待できるのではないかと私は思った。

そして、「頑張ろう、日本」というスローガンから考えることがある。初めてこのスローガンを耳にした時、正直感動した。しかし、震災発生3ヵ月を経て、被災地でまた被災者が避難所で生活せざるを得ない状況を見て、原発の問題もほぼ変わってないし、これから被災地の人々がどうやって生活すればいいのかを考えて、やはり「復興」には「ガンバリズム」だけではだめだと思った。

日本と違い、中国では、大きな災害が発生したら、あるスローガンが必ず出てくる。それは「一方有難八方支援」、「どこかに困難があれば四方八方から支援が来る」という意味である。ただ言い方が違って、立場を変えて、

被災者たちの気持ちを考えたら、中国の方が効果的ではないかというように思った。

ある番組を思いだした。記者がある被災者に「頑張れますか?」と聞いたら、「もう頑張れない!」と答えた。家も家族もない今、どうやって頑張ればいいのか。その場面と話は私に強い印象を残した。もしかしたら、『復興の精神』の中南直哉さんのおっしゃったように、我々には生き方を変えるような「切実な志」が必要だと思う。

この夏、原発の問題があつて電力不足が大きな問題になっている。「節電」という言葉を毎日耳にする。停電されないよう、「節電」は自分のための行動だが、少しずつ日本社会が変わっていくと感じた。夜でも明るい東京が暗くなっても、「それはいいじゃないか」、「もともと東京が明るすぎる」という意見も出た。日常生活に深くかかわる「節電」行動がこの夏から日本人の考え方や生き方を変えていくのではないかと思う。

東日本大震災が発生した4ヵ月を経た今、私たちができることは何だろうか。そして現在の日本にとって一番大切なのは何だろうか。「頑張ろう」の一言はもちろん重要だが、被災者たちを元気づけよう、彼らの今後の生活や人生は元に戻るという「信じる」力も大切だ。節電をはじめ、この夏から日本人の生き方が変わっていく。そして、今こそ全国一人一人の力が必要となっていると信じている。

<参考文献>

伊藤滋、奥野正寛、大西隆、花崎正晴 編 (2011)『東日本

大震災 復興への提言—持続可能な経済社会の構築』

東京大学出版会

養老孟司、茂木健一郎、山内昌之、南直哉、大井玄、橋本

治、瀬戸内寂聴、曾野綾子、阿川弘之 (2011)『復興の

精神』 新潮社

地震を通して見た日本人

早稲田大学法学部2年 羅 ハンソル

3月11日、1時から10時半まで西武新宿ペペでアルバイトの予定だった。1時にお店に着いて接客をしていた。天気があまり良くなかったせいかお客さんも少なかったので店長とおしゃべりをしていた。早番スタッフが休憩に出て間もない2時半過ぎくらいだった。照明が少しずつ揺れだした。「揺れてる、ちょっと長くない。後10秒くらい経っても続いてたら棚の下に潜ろう。」と店長が言った。揺れは収まらなかったなので、棚の下に潜った。

その直後、お店の照明2個が割れて落ちてきた。「怖い」、その時初めて直感した。これ結構大きい地震だなんて。日本は地震が頻繁に発生する国というのは昔から知っていて、少しの揺れはたまにあるかも知れないと留学手続きをしてくれた留学院から聞いたことがある。今住んでいる家が木造のせいか、たまに家自体が揺れる時があったので、少しの揺れには結構なれていた。でも、こんなに長いのは初めてで、しかも、生まれてからずっと日本に住んでいる店長さえ慌てていたので、

たまに揺れる程度のものではないことが感じられてきた。

休憩に出ていたスタッフが真っ青な顔で戻ってきて、「ペペは建物が細長いから、折れるんじゃないかなって思うくらい揺れてたよ、私の前にコンビニの看板が落ちて超怖かった。」と建物外での体験を語り始めた。ビルの営業部からこの建物は安全だという放送が流れてきた。続いて、揺れが少し収まったら警備員たちがお客さんたちを先に出していた。照明が消えて皆慌てて外に出ている中も、買い物をし続けているお客さんも何人かいた。

プリンスホテルの宿泊客のスーツケースが、1階にたくさん並んでいた。私たちスタッフに対する指示は最後まで下ろされなかったが、そのくらい皆初めて体験するものだったので、慌ててしまってマニュアル通りに行かなかったと思う。5時頃に閉店が決定されてスタッフたちは徐々に帰り、私も電車が止まっていたため、他のスタッフのお父さんに車で家まで送ってもらってやっと帰ることができた。帰宅者たちのせいで道は混んでいて電車で15分くらいの近い距離を車で3時間以上掛って到着した。

今回の地震で、2年間日本で生活しながらもほとんど感じなかったカルチャーショックを何回か受けた。地震の日、車に乗っている間、私を驚かせたのはすべてが止まって大混乱状態になっている中をジャージ姿で犬と散歩している人々だった。確かに8時くらいだったので犬を散歩させる時間ではあったが、こんな大きい地震があつてニュースでも東北

の悲惨な映像がたくさん流れている中で犬と散歩に行こうという気持ちが湧くことに大変ショックを受けた。

そして震災の日からコンビニやスーパーマーケットの品物不足状態が続いたが、その中でも在留している韓国人の中で一番の話題になっていたのが日本人のトイレトペーパーの買い溜めだった。皆が口を揃えて「韓国では絶対あり得ないこと」だと言った。地震が起きた次の日にサークル活動のこと（地震に関係するのではなく）や新学期どういう科目を取るかを聞いてくる日本人の友達のことがあまりにも理解できず、皆で話し合った。

韓国の新聞では「大混乱の時でも秩序を守る日本」というタイトルで日本人の秩序意識を褒める一方、生命力がないのではないかなという懸念もあった。一生懸命生き残るのではなく、何があっても周りの人に迷惑かけないで人に恥ずかしくない生活を送るのを第一にする。私はそういう日本人の意識には、特に今回のような震災に際して、学ぶべきところが多いと思う。

トイレトペーパーについてはまだ自分では同じ行動を取ることはないと思うが、助けあってもっと大きい混乱を防ぐというのは、結果的にはもっと多くの笑顔を作れることだと思うからだ。

原発事故で避難民が埼玉あたりまで移動してきた時、知り合いの埼玉住民の方から安否確認と共に避難所のボランティア活動で忙しいというメールが送られてきた。避難所が作られてから沢山の住民たちがボランティアで

訪れたらしい。避難地域を支援する団体の動きも速かった。東北に送る布団や服なども集められた。

日本に来る前までも、そして日本で生活していても、私や大半の韓国人の友達も日本人は愛国心がないという印象をよく受けていた。今回日本人の人々が見せたのは少しでも自分ができることで助け合う精神、それも自分が育ったこの国を大切にしている愛国心だと私は思う。ただ、個人的に思ったのは学生からの活動が非常に少なかったのではないかとこのことだ。災害があった時やFTA 協定など国際的な問題まで学生たちが主になったボランティア活動やデモなどが行われる。

日本の学生は設けられたものには参加するが、自ら進んで計画を立てて活動自体を作るといったようなものは数少なかったのではないかと思った。私も韓国で災害が起こったり国家的な問題があつたりすると、大学だけではなく中学校、高校でも、皆でボランティアに行ったりデモに参加したりしていた。学校自体が皆で行こうという雰囲気になっていたからである。

今回の震災で様々なことを体験し思ったが、その中でここで伝えたいことは、韓国人の留学生から見た、そして見直した日本の姿だ。世界が褒めた日本の秩序意識はやはり素晴らしい。危機意識は他の国の人々に比べて少なく、心配されるところもあったが、黙々と助け合うところにも感動した。

ただ、ボランティアなど無償で助け合うという行動は、大勢で進んで行った時の方が確

実に影響力は大きいと思う。特に他人と違う行動を取って目立つことが苦手な日本人は、先頭に立つことは大変であると思う。だからこそ、この震災をきっかけに苦難を乗り越える時の、一人ひとりの力の大切さを深く感じる事が、必要だと思った。

東日本大震災 —苦しみは誰のものなのか？

早稲田大学国際言語文化研究所招聘研究員
ピーター・マックミラン

I

東日本大震災の発生からすでに半年が過ぎている。マスコミも震災以外の出来事に注目するようになり、平常の状態に戻りつつある。しかし、日本が国として前に進むためにはこの未曾有の大災害から学ばなくてはならない大切なことがあるようだ。たとえば、サステナブル（持続可能）な経済の推進、原子力発電の再評価、自然の教訓を生かすための方策が必要なのではないか。また、震災によって表面化したこのような課題は地球の天然資源の枯渇や物品、電気の過剰消費等が進行しつつある現在においては世界共通のテーマである。

それでも震災の日から私の頭の中を駆け巡る一番の疑問は、“苦しみは誰のものなのか？”ということである。きっかけは震災後多くの外国人が日本を離れたとマスメディアが報道したことだった。私自身は第二の故郷

である日本を見捨てることができず、ブログを立ち上げて外国人にも日本人にも状況を伝える活動を始めた。そして、海外に住む人からはもちろんのこと、英語を得意としない多くの日本人が外国メディアの震災報道を知るため私に連絡を取るようになったのである。この経験を通して東北の災害は世界にとっても大変な悲劇であり、被災者の苦しみ、悲しみを分かち合うべきだと痛感した。

ところが、震災後のある日某大手新聞のコラムで次の文章を読んだ：

観光客ばかりか、出張者や留学生、外交官までが日本脱出を急いでいるらしい。物心の支援に感謝しつつ、この国は自らの手で立て直すしかない胸に刻んだ。

そして次の一文で結ばれたのである。

大戦の焼け野原から立ち上げたこの国において、私たちに帰るべき場所はない。

私はこの記事にショックを受けた。日本人と共に日本復興のため、何かできることはないのかと考えていたのに、記事内の「自ら」「私たち」には明らかに外国人は含まれていない書き方をしていたからである。私はこの某大手新聞社に手紙を出し、自分は日本に20年以上居住する外国人であること、阪神淡路大震災の際にはボランティアとして2回神戸に入り、この度の東日本大震災後は帰国する多くの外国人の気持ちを理解しつつも、家族の反対を押し切り日本に留まり積極的に翻訳

などのボランティア活動で支援してきたことを述べた。そして3月20日に掲載された上記の記事の外国人を排斥する内容には衝撃を受け、大変失望したことを伝えたのである。

もちろん、この手紙がコラムに掲載されることはなく、今こそ日本社会の一員としてこの悲しみを共有したいと思っているにもかかわらず、締め出されてしまったと感じたのである。

II

震災後、私は小さなアイデンティティの危機を経験した。震災という非常事態に直面した日本国民と悲しみや苦しみを共有したいという私の強い気持ちを否定され、この国で私の未来はあるのかと自問自答したのである。

そして、題名とした“苦しみは誰のものなのか？”という疑問を考えてみたいと思う。ブリューゲルの名画『イカロスの墜落のある風景』を取り上げたW.H.オーデンの有名な詩をご存じだろうか。



イカロスの墜落のある風景

美術館 Musée des Beaux Arts

(沢崎順之助 訳)

昔の巨匠たちは、受難について決して間違わなかった、

その人間的位置を、彼らは何とよく理解していたことか、ほかの連中が食べたり窓を開けたり、ただのろのろ歩いている間に、どんなふうにも受難が起るかを知っていた、

…たとえば、ブリューゲルの「イカロス」だ。何もかもまったくのんびりして、彼の災難を顧みようとせぬ、農夫はざんぷという墜落の音や絶望の叫びを聞いただろうが、重大な失敗だとは感じなかった。太陽も相変わらず、緑の海に消える白い脚を照らしていた。ぜいたくで優美な船も、驚くべきものを見たのに、空から落ちる少年を見たに違いないのに、行くところがあって、静かに航海を続けたのだ。

(一部抜粋)

他人の苦しみを自らのものとして意識することが難しいことを昔の偉大な巨匠たちは理解していた、とオーデンは讃えている。その例として挙げられたブリューゲルの絵にはイカロスが海に落ちる姿が右下に小さく描かれており、よく観察しないと確認できない。どうか片足が海に入る瞬間が見えるだけである。ブリューゲルと同様に、オーデンにとってこれが苦しみというものを象徴している。自分が同じ苦しみを味わうことがなければ、他人の苦悩には無関心なのである。

偉大な巨匠たちが指摘したように苦しみは身近になれば気付くことが難しい。まん延する飢餓、エイズやその他の病気によって死んでいくアフリカの人たちのことを、私たちは日頃考えているわけではない。しかし、今回の東日本大震災に関しては、発生直後から大きくメディアに取り上げられ、これが世界

中の人々がその苦悩を共有している理由の一つではないか。国際社会の反響には目覚ましいものがあり、この災害を機に日本に対する同情の念や評価が大きく上がったことを実感している。そして私も東北の皆さんの苦しみを分かち合い、日本を良くするために何らかの貢献ができるのではないかと感じ、この国でのアイデンティティを再確認したのである。そして心の葛藤を乗り越えることができ、日本での生活をこれからも続け、復興に少しでも貢献したいという気持ちを強く持つようになった。

私を導いているのは、このブリューゲルの絵を取り上げたオーデンの詩とは違い、国境や国籍に関係なく自分も他人も同じ苦しみを持っている、という思いである。イカロスの足が日本だとしたら、農夫や太陽や船は日本以外の他の国を表わすわけではない。国境や国籍に関係なく、自分も他人も同じ苦しみをもち地球に存在する者同士である。震災後の今の日本が一番苦しいに違いない。その苦しい時期だからこそ、日本の将来のあるべき姿を考えるべきではないだろうか。どこまでお役にたてるか自信はないが、その日本の将来に少しでも貢献できたらと思った次第である。

(訳：村上万里子)



津波の被害を受けた線路（大船渡市）